

# 博物館展示をジェンダーの視点から 見つめ直す試み

大学における「課題解決型学習」の実践例として

Reconsidering Museum Exhibits from the Perspective of Gender Based on the  
Practical Example of “Project-based Learning” in a University

MIKAMI Yoshitaka

## 三上喜孝

### はじめに

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」（2016年度～2018年度、研究代表者：横山百合子）の第1回研究会において、歴博の総合展示を、ジェンダーの視点から見直そうという試みがなされた（「NEWS LETTER 日本列島社会の歴史とジェンダー Vol.01」2016年7月参照）。具体的には、共同研究員が展示室をめぐり、展示資料や解説パネルを前にして、展示内容にジェンダー的な視点がどれだけ取り入れられているのか、あるいは取り入れられていないのかについて、意見交換を行うという試みである。

そもそも歴博の総合展示は、その基本計画の段階において、ジェンダーの視点を取り入れることを意識していたわけではなかったため、結果的にジェンダーの視点を十分にとりいれたとはいえない展示内容になっている。共同研究員の間での意見交換の中でも、ジェンダーの観点からみて問題のある展示内容について、数多くの指摘があり、博物館展示をジェンダーの視点から見直すよい機会となったと同時に、その検証を不断に行っていくことの必要性を痛感させられた。

こうした試みを継続的に行うことができないだろうかと考えていたところ、2018年10月に山形大学人文学部の学生を対象に行った「課題演習（芸術文化）」（2018年10月25日～26日実施、担当教員：石澤靖典、佐藤琴）、2019年2月に千葉大学人文学部の学生を対象に行った「比較ジェンダー史実習B」（2019年2月13日～18日実施、担当教員：池田忍、横山百合子）の各授業（いずれも、歴博を会場として行った）をお手伝いする機会に恵まれ、歴博の総合展示をジェンダーの視点から見直してもらい、その問題点を受講生にプレゼンテーションしてもらおうという形式の授業を試みることになった。

本稿では、2018年度に行われた二つの大学の演習での試みを通じて、博物館展示をジェンダー的視点から再検討するための実践的方法論と、それを取り入れた教育プログラムの一つのモデルを提示してみることにしたい。

## 1. 「博物館展示をジェンダーの視点から見直す」授業プログラムの概要

近年国立大学では、「課題解決型学習」を、授業の中に積極的に取り入れることが求められるようになってきている。博物館展示を、ある視点から見つめ直し、その問題点を指摘し、新たな展示案を提案するという一連の授業プログラムは、「課題解決型学習」の趣旨にも合致しているといえよう。すなわち博物館展示をジェンダーの視点から見つめ直す試みは、同時に「課題解決型学習」の一つの授業モデルとしても活用できるものと考えられる。

山形大学と千葉大学の学生を対象に行った各授業は、時間配分に細かな違いはあるものの、基本的には、以下のような進め方で行った。

### ①午前10時 歴博の第2研修室において、ガイダンスを行う。

まず、この日の授業で、どのようなことをするのかについてのガイダンスを行う。博物館展示をジェンダーの視点から見直してみることにについて、認識を共有してもらうために、どのような点に注意して展示を見ればよいのかなどについて、簡単な解説を行う。ガイダンスにあたっては、本共同研究で松本直子氏が発表された「先史時代のジェンダーと博物館展示」(「NEWS LETTER 日本列島社会の歴史とジェンダー Vol.01」2016年7月)にその概要が示されている)等を参考にした。

簡単な解説のあと、班分けを行う。全員が、総合展示のすべてについて限られた時間で見学することが難しいので、全体を5班に分け、それぞれの班が総合展示の第2室～第6室の中から一つの展示室を担当する(第1室はリニューアル工事中のため除外した)。班分けや、担当の展示室は、自分の専攻とする時代や関心のある分野とは関係なく、すべてくじ引きで決定することとした。

山形大学は受講生が22名で、一班あたり4～5名、千葉大学は受講生が14名で、一班あたり2～3名となった。

### ②午前10時30分～午後3時 展示室の見学と、プレゼンテーションの準備

班分けと担当の展示室が決まったら、あとはプレゼンテーションまでに自由に時間を使って、展示室の見学と、プレゼンテーションの準備を班ごとに行ってもらおう。昼食もこの時間の中で適宜とってもらおう。それぞれの時間配分については、各班の裁量に任せることにし、展示室と第2研修室を自由に行き来できるようにした。

各班のプレゼンテーションにあたっては、プロジェクターに展示資料の画像を投影しながら発表してもらうので、展示を見学しながら、問題となる展示資料や解説パネル等の写真を撮ってもらう。各班は、ほかの展示室についてほとんど見学できないので、展示室を見ていない人にもわかるようなプレゼンテーションを準備してもらうためである。

### ③午後3時頃～午後5時頃 各班によるプレゼンテーション

各班により、10分程度のプレゼンテーションを行ってもらい、その後5分程度、他の班の学生からの質問やコメント、担当教員のコメントを行う。

発表にあたっては、展示室で撮影した写真をプロジェクターに投影しながら、各班の学生が交替で発表する。余裕があれば、パワーポイントを作成する。

山形大学の場合も千葉大学の場合も、当初、この授業の意図を受講生が理解してくれるかどうか不安だったが、その不安は杞憂に終わった。プレゼンテーションはどれも意欲的な内容で、各発表のあとに行われた意見交換も活発だった。以下では、この二つの授業でとくに印象に残ったプレゼンテーションの内容について簡単に紹介することにした。

## 2. 現状の博物館展示をジェンダーの視点から見直す

以下では、どの大学がどのようなプレゼンテーションを行ったかをとくに特定せずに、2回の授業の中で、総合展示の各室に対してどのような問題点があげられたかについて、筆者がとくに印象に残った点を記すことにする。

第2室「中世」でまず受講生たちの注意をひいたのは、貴族の装束だったようである（写真1）。十二単の女性が前方に座り、後方に正装の男性と略装の男性が立っているという様子は、ジェンダーの視点から見れば違和感を抱かせるものである。なぜ女性は座り、男性は立っているのか、なぜ女性は十二単だけなのか、といった疑問から、これらの男女のあり方がステレオタイプの王朝貴族像であることをあらためて思い知らされる。合わせて、王朝文化の特質を「女性的」と記す解説パネルについての違和感も示された。



写真1 総合展示第2室「中世」 貴族の装束

また、田植えの労働について、パネル展示されている「月次風俗図」の、女性の田植えの様子と、その前に並べられている農作業をしている男女の人形との関係が、いまひとつよくわからず、農作業労働に男女がどのようにかかわっていたのかについて理解を深める解説が必要なのではないかと指摘もあった。

ほかにも、絵巻の「朝覲行幸」の場面などにみえる見物客の男女の描き方（とくに坐り方など）、あるいは中世の夫婦の板碑の高さが同じである点などは、ジェンダーの視点からさらに解説を深めることが可能なのではないかと指摘もあった。

第3室「近世」については、身分の違いはわかりやすく展示されているが、男女の違いがわかりにくいとの指摘があった。そもそも、この時代の「目」は、どのようなものであったのか。当時の男女がお互いについてどのように考えていたのか、あるいは男女がどうあるべきだと考えられていたのか、カステリオーネの『宮廷人』のような資料が、展示の前提にあるとわかりやすいとの意見なども出た。

また、旅のイラストについて議論が集中した。旅の宿で、男性のみが飲食をし、働くのは女性のみであることへの違和感や、川を渡る女性が、体格のよい男性に運ばれるイラスト（写真2）が、「女性はかawaiiもの」というイメージを喚起させるなど、男女のイメージがかなり固定的に描かれているのではないかと指摘があった。

筆者が個人的に最も興味をひいたのは、第4室「民俗」に関するプレゼンテーションだった。前半に「女性のおしゃれ」についての展示が並ぶ一方で、後半の職人像が男性ばかりである点は、受講生たちの違和感を抱かせるものだったようである。女性は娯楽との関係が強調される一方で、男性が職業との関係が強調されることへの違和感である。ほかに、儀礼への参加に男性が目立ち、女性が少ない点や、出産についても、生まれてくる子どもに焦点が集中し、出産する女性についての言及が少ないこと、などが指摘された。

ジェンダー差が最も明確に現れている象徴的な事例と受講生たちが感じたのは、男女の小学生の勉強机の展示についてであった（写真3）。男子小学生の勉強机が雑然としている一方で女子小学生の勉強机が整頓されていることや、男子小学生のランドセルが黒で、女子小学生のランドセルが赤であることなど、男子と女子の、ある時代の固定イメージを明確に示すものであると指摘された。キャプションでは「現代の」と書かれているが、ここにみえるジェンダー観は現在のものとも齟齬するのである。子育てに関する展示においても、「今度の日曜日にどこの遊園地に連れて行くかネットで調べておこう 父：誠」「お母さんはいま片付けをしているんだから、お父さんに遊んでもらいなさい 母：陽子」というキャプションがあり、「父は家族サービス、母は家事という性役割が表されていると感じた」との意見もあった。



写真2 総合展示第3室「近世」  
旅のイラスト



写真3 総合展示第4室「民俗」小学生の勉強机



写真4 総合展示第5室「近代」ポスター

第5室「近代」では、ポスターや看板に女性が多く使われるようになることが受講生たちに注目された。近代以降のこうした傾向は、消費される存在としての女性というイメージが形成されていったことを示すものではないかとの意見も出た（写真4）。また、華やかな若い女性が働くイメージが強調されているとの指摘もあった。

第6室「現代」で多くの受講生たちが注目したのは、闇市を復元した人形模型である（写真5）。11体中10体が男性で、女性はタバコを売る老女のみが復元されている。ところが模型の背後で映し出されている当時の闇市の映像では、闇市に出入りする女性もそれなりに数が多い。実際の映像と、模型との印象の違いに、受講生は戸惑いを覚えたようであった。子どもが靴を磨く姿など、人形にはステレオタイプの姿が描かれることが多いことを思い知らされる。

また、この時代の女性の存在感が「主婦」という形で示されていることの意味も考えさせられるものであった。女性の主体が主婦だけでなく、工場で働く女性が多かった事実も示すべきであり、あるいは、女性が「主婦」の立場として主張していかざるを得なかったという現実も説明すべきであろうとの意見も出た。

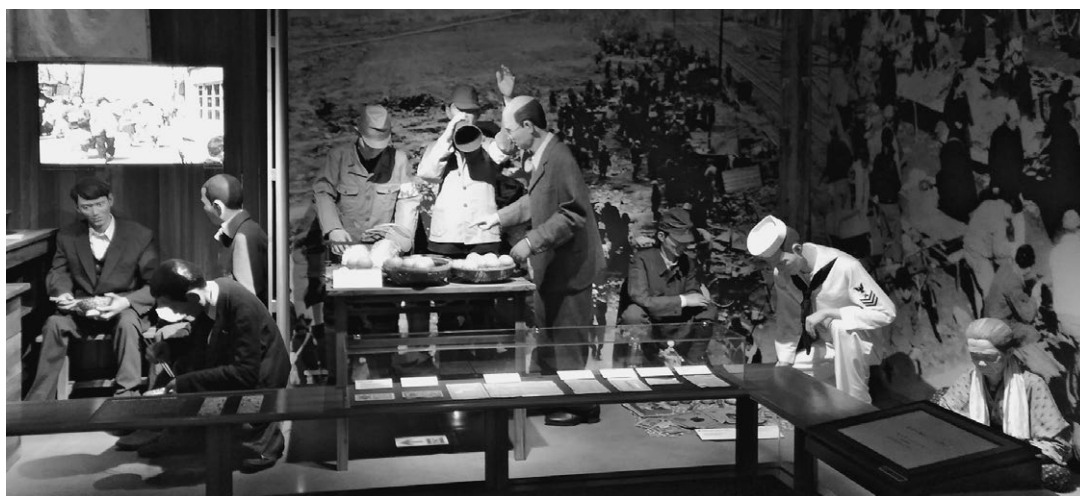


写真5 総合展示第6室「現代」 闇市の復元

以上、山形大学と千葉大学の学生によるプレゼンテーションの内容を紹介した。もちろん、展示を作る側にも専門的見地からの「言い分」があり、個別の反論も可能であろう。筆者自身も、各班のプレゼンテーションに対して、展示が現状のような形になった背景や意図を言い訳的に説明したところもある。だが学生のプレゼンテーションの内容の大半は納得できるものであり、視点を変えるだけでこれだけの問題点を引き出せるものなのかとあらためて驚かされた。

山形大学の「課題演習（芸術文化）」は、時間の都合上、ここまでが授業のプログラムだったが、千葉大学の「比較ジェンダー史実習B」は、この後、集中講義の最終日にもう1回、各班によるプレゼンテーションを実施した。今度は、ジェンダーを意識した展示案を作成し、プレゼンテーションするという課題である。学生たちは最後にどのような展示案を考えたかを、次に紹介しよう。

### 3. ジェンダーを意識した展示案を作る

千葉大学「比較ジェンダー史実習B」では、最終日に「ジェンダーを意識した展示案」を各班が作るようになった。集中講義の期間の中に各班による準備日をもうけた上で、最終日の1日を使ってプレゼンテーションを行った。1班あたり、発表と質疑応答を含めて1時間ほどかけ、初日のプレゼンテーションよりも丁寧に議論を行った。司会は教員ではなく、学生が輪番で担当し、できるだけ多くの学生が発言できるように配慮した。

池田・横山両教員が展示資料となる素材（近世・近代の文書史料、絵画資料など）を事前に提供し、それに基づいて展示案を作成することを当初はめざしていたが、結果的には必ずしもそれにこだわらず、授業初日の総合展示の観察を素材に、それをジェンダー的観点から作り直すというやり方で展示案を作成した班もあり、それがかえってたいへん興味深い展示案ともなった。ここでは、初日に第4室「民俗」を担当した、第3班の展示案を紹介することにする（次々頁の図）。

第3班の展示タイトルは「性別を超えて」である。あえて「ジェンダー」という言葉を用いず、展示を見た個人個人が、展示を見ることにより「ジェンダー」を意識するような仕掛けをねらったという。

導入として、第4室に展示されていた男女の小学生の勉強机を見せ、「これは今まで歴博で展示されていた“現代の”男の子と女の子の机です。どちらが男の子で、どちらが女の子でしょう。また、なぜそう思いましたか？」と、どちらが男子小学生の勉強机で、どちらが女子小学生の勉強机かを問いかける。また、なぜそう思ったのかという理由も同時に問いかける。それにより、自身の中であたりまえと思っている感覚を問い直す機会を与えることになる。

次に、展示室の真ん中に、「現在の」小学校の教室を再現する。教室の机の上には、色とりどりのランドセルを置く。かつては「男子は黒、女子は赤」のランドセルがあたりまえだったが、いまはそうしたジェンダーによる区別の意識は薄れ、多様な色を選ぶことができていることを視覚的に表現するのである。

黒板には男女混合名簿を掲示する。かつては男女別の名簿だったものが、1999年の男女共同参画基本法の制定にともない、男女混合名簿が普及していったという背景も説明することで、男女別の名簿から男女混合名簿への変遷をたどれるようにする。

教卓に音声機器を置き、出席をとる声を流す。かつては、男子児童を「君」付け、女子児童を「さん」付けにしていたものが、いまでは男女の別なく「さん」付けにしていることを、実際の音声聞かせることで示すのである。

こうした教室の展示は、各世代により受けとめられ方も異なるであろう。そうした受けとめられ方の違いも含めて、各世代の関心と呼ぶ展示の仕方になるように工夫する。

展示室の壁面は、第1章から第4章まで、4つのトピックを中心に展示構成を考えた。

第1章は「性役割のイメージ」と題して、「男は仕事、女は家事」というイメージが、いつから、どのように形成されていったのかを問いかける。絵画資料を用いてかつての「主婦」の表象を示したり、あるいは統計資料を使って、共働きの家庭が増加しているにもかかわらず、妻が家事や育児をする時間が減っているわけではないことなどを示したりする。

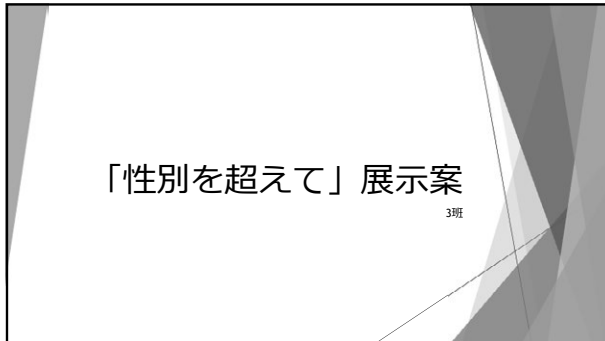
第2章は「育児の担い手」と題して、近年増えつつある男性向けの育児グッズ（男性向けの抱っこひもや液体ミルクなど）を展示する一方で、男性の育休取得率がほとんど増加していない現状を統計資料によって示すことで、いまだ育児の負担が女性に重くのしかかっている状況を示す。

第3章は、「学校と性差」と題し、おもに男女制服に注目した展示を行う。学校の制服は、男子＝スラックス、女子＝スカートで統一されているのが一般的だが、近年では、そうした区分を取り払い、男子も女子も自由に制服が選べる「ジェンダーレス制服」を導入する学校があらわれている。こうした「ジェンダーレス制服」を、「女子＝スラックス」「女子＝スカート」「男子＝スラックス」「男子＝スカート」という4体のマネキンを使って表現する。

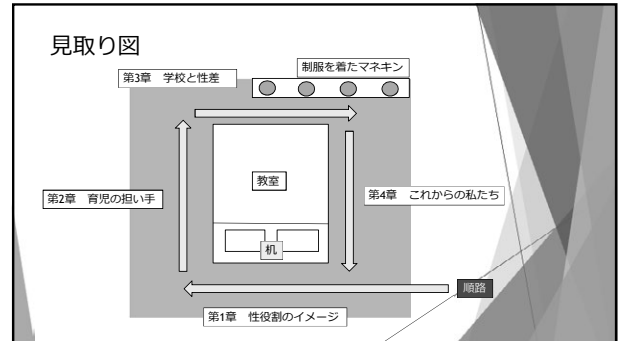
第4章は「これからの私たち」と題し、慣用句や歌など、これまでさまざまな媒体を通じて男女の役割の違いを意識させられてきたことについて、あらためて考え直し、男女の役割を固定的に考えることからの脱却をめざすことを提案する。たとえば、現在の官公庁のパンフレットなどを展示し、そこで男女がどう描かれているか、といった点にも、注意深く目を向けていく必要があると強調する。

以上が、第3班の展示案の概要である。初日の総合展示の見学の際に疑問に思った、「男女の小学生の勉強机」に端を発し、そこから展示案を作りあげていった様子が手にとるようにわかる。歴

図 展示案のプレゼンテーションの一例



1



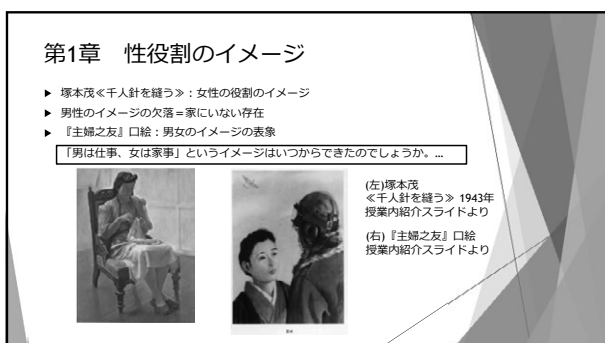
2



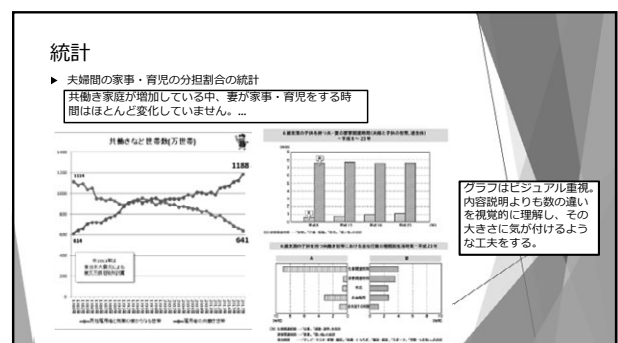
3



4



5




6



### 第2章 育児の担い手


- ▶ 本棚：歴博の展示のまま、男性向けなど多様化する育児の様子を本で展示  
 出産や育児は今や女性だけのものではありません。積極的に参加する男性も増加し育児が変化してきています。...
- ▶ 男性向け育児グッズの展示（キャプションは品名のみ）



男性向け抱っこ紐    抱っこできるパーカー    液体ミルク

7

▶ 統計：育児取得率の差  
 しかし男性の育児取得率はいまだ低く、社会の理解が得られていません。...




年	女性 (%)	男性 (%)
02	81.1	48.1
03	81.4	54.4
04	81.7	64.0
05	82.0	68.0
06	82.3	72.0
07	82.6	77.0
08	82.9	81.0
09	83.2	85.0
10	83.5	89.0
11	83.8	93.0
12	84.1	97.0
13	84.4	91.0
14	84.7	95.0
15	85.0	89.0
16	85.3	93.0
17	85.6	87.0
18	85.9	91.0
19	86.2	95.0
20	86.5	89.0
21	86.8	93.0
22	87.1	87.0
23	87.4	91.0
24	87.7	85.0
25	88.0	89.0
26	88.3	93.0

(出所) 厚生労働省「平成 26 年度雇用均等基本調査」

8

### 第3章 学校と性差

- ▶ 制服の多様化  
 これまでの制服は男子がスラックス、女子はスカートと決まってきました。しかし最近では、男女関係なく自由に制服を選択できる学校も増えてきています。...




- ▶ マネキンの展示：4体（女子スカート、男子スカート、男子スラックス、女子スラックス）

9

### 第4章 これからの私たち

- ▶ 性別役割が強く感じられることわざ・慣用語・歌詞を壁にデザインし、キャプションで鑑賞者にこれからの社会や意識の在り方について問いかける。  
 (例) 女房と旦那は新しい方がいい、女三人寄りば慕しい、男は家をつくり女は家をつくる、さだまさし「開白宣言」の歌詞 等

私たちは無意識に性差を感じ、社会は未だその意識に支配されています。男女の区別を超えて、私たち自身のこれからのことについて考えてみませんか？



10

### 参考・資料引用文献

- ▶ 若森みどり『戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房、1995年
- ▶ WWA(Woman's Activities Association) 『“女らしい”ってなあに？“男らしい”ってなあに？～男女の新しい生き方を考える本～』（ジェンダーの視点でのグローバル教育素材）青年海外協力協会、1995年

11

---

史展示というよりも、現在のジェンダー意識に関する啓発的な展示といった性格が強いが、展示を見る各世代の人びとが、この展示を通じて多様な受け止め方ができるような仕掛けになっている点で、興味深い展示案になっていると思われる。

山形大学での授業では、時間的制約から、既存の博物館展示をジェンダーの視点から見直すことまでにとどまっていたが、千葉大学の授業では、それに加えて、ジェンダーを意識した展示案を作りあげるといふプレゼンテーションを行ったことで、より「課題解決型学習」の趣旨に合致し、一定の成果をおさめたものになったと考える。今後の授業モデルとしては、「既存の博物館展示の問題点の洗い出し」と、「それを解決するための新たな展示案の作成」という二つのプレゼンテーションを行うことが必須になってくるだろう。

## おわりに

以上、大学の演習の中で「博物館展示とジェンダー」の問題をどのように取り上げていくかについて、その実践例を紹介した。まだ試行錯誤の段階だが、今後もブラッシュアップしながら、この授業モデルを構築していきたい。

最後に、千葉大の集中講義終了後の受講生の感想を一つだけ紹介しよう。

「今回の授業で特に勉強になったことは、展示は、自分が注目するテーマによってさまざまな見方ができるものなのだということ。私は、今回の授業以外でも何度か歴博を見て回ったことがありますが、今回「ジェンダー」という視点から歴博の展示を見たことで、今までとは違った展示の見方をすることができました。今まではあまり気にしていなかったことや展示に注目することができたり、展示に対する感想が変わったりしました。このことは、1日目の皆さんの発表を聞いていて特に強く感じました。「ジェンダー」という視点だけではなく、ほかの視点からも歴博の展示を見ると、また変わった見方ができ、感想や印象も変わってくるのではないかと思いました。」

受講生の感想にあるように、ジェンダーに限らず、さまざまな切り口を設定して博物館展示を見直し、意見交換を重ねていくことによって、展示内容の抱えている問題点を浮き彫りにすることが可能になるのではないだろうか。

## 〔付記〕

本稿の内容の一部は、2019年5月26日に行われた歴史学研究会大会の特設部会「歴史学における男女共同参画」において報告した。報告の概要は『歴史学研究』(989, 2019年10月)に掲載した。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2018年12月7日受付, 2019年5月28日審査終了)